

室町時代のある日のこと、

一天にわかにかき曇り、

空中から異様な怪音とともに

寺川のほとりに落下物があつた。

この落下物は、一個の翁の能面と一束の薙で、

村人は能面をその場にねんごろに葬り、

薙はその地に植えたところみごとに生育し、

戦前まで「結崎ネブカ」として名物になった。

こんなユーモアあふれる伝承の残る
隠れた魅力いっぱいの川西町



川西町・沿革

川西町は、古くは水運や農業の町として発展してきましたが、近年においては住宅地開発や工業団地の誘致等により、コンパクトな田園都市の機能を備えた緑豊かな町として発展してきました。また「島の山古墳」や「筋違い道」などの文化遺産を有することから、古墳時代には、すでに豪族の存在があったことが推察されます。中世には集落が形成されるようになり、現在の字名が使われ始めました。時代の推移とともに統治者も変わり、幕末には郡山藩の支配下に置かれ、明治22年に結崎・下永・吐田・唐院・梅戸・保田の六ヶ村が合併して川西村が誕生。昭和50年4月に町制が施行されて川西町がスタートしました。



能楽観世流の元となったのは、室町時代に現在の川西町結崎で活動していた猿楽の一座・結崎座です。その結崎座に所属し、大夫(座を代表する役者)を勤めていた観阿弥清次が観世流の初代です。面塚や川西町の田園風景から、農耕が芸能を支えていた観世流のルーツを感じます。

二十六世観世宗家 観世 清和



面塚

めんづか

「結崎に好き男あり。いわゆる世阿弥なり」
天才的な技と、
優美な姿に魅了されてしまった
将軍義満の言葉が、
その当時の能の華やかさを物語る。



『翁』二十六世観世宗家 観世清和 撮影：前島吉裕

能楽「観世流」発祥の里

奈良盆地に広がる田畑の中を流れる寺川のほとりに「面塚」の石碑と、「観世発祥之地」と刻まれた石碑が建つ公園があります。石碑の建立は昭和11年で、発祥之地の碑は二十四世観世宗家観世左近師の筆によるものです。河川改修で位置が変わり、昭和42年に現在の姿になりました。公園を囲む玉垣には奉納した全国の能楽師らの名が刻まれています。

能楽観世流のルーツである猿楽「結崎座」は室町時代、川西町結崎を拠点としました。その大夫(座を代表する役者)を務めたのが観世流創始者・観阿弥で、結崎に住んでいたといわれています。

猿楽は江戸期までの能楽の呼び方で、古代中国から伝わった歌舞や曲芸などの芸能「散楽」が源流とされ、朝廷や社寺の祭礼などで演じられました。平安期ごろから猿楽と呼ばれ、芸能集団「座」が組織されるようになります。室町時代、大和(奈良)で活動していた大和四座の一つ結崎座に観阿弥が加わり、芸能として洗練されました。足利義満に認められて座名も観世座と改め、息子の世阿弥と共に現在の能楽観世流の基礎を築いたといわれています。